<4月8日 J・A・M セディックSt>

たとえばこんなふうに、1993年の春からYUKIの小さなスケジュール帳は、この3つのアルファベットで占められていた。

JUDY AND MARYを略して<J・A・M>。

記念すべきデビュー・アルバムのタイトルは、ここからネーミングされた。発売は1994年1月21日。しかしバンドはこのときすでに、「キケンな2人」「RADIO」そして「Hello! Orange Sunshine」といった新しい楽曲を完成させていた。『J・A・M』のレコーディング終了後もライブやキャンペーンと並行してスタジオ・ワークは続いていたのである。

デモ・テープをもとに4人でスタジオに入り、セッションしながら楽曲を仕上げていく。恩田だけでなく、TAKUYAも作品を持ってくるようになり、2ndアルバムに向けてJUDY AND MARYの音楽の世界が少しずつ広がっていく予感をメンバーの誰もが抱いていた。

さらにはそこに、新たな出会いが訪れる。

「こちらが、プロデューサーの佐久間さん」

「よろしくお願いします、YUKIです」

「佐久間です」

「キケンな2人」のリハーサルを行っていたスタジオにやってきたのは、佐久間正英だった。長身で、どこか飄々とした様子のこのサウンド・プロデューサーを前に、YUKIは緊張を隠せない。

ブルーハーツやBOØWYを手がけていたという話はスタッフから聞かされていたし、四人囃子、プラスチックスという伝説のバンドでプレイしてきた佐久間と一緒に音楽を作れると、あの五十嵐や恩田が興奮しているのである。

(あたし、やりたいことをちゃんと伝えなきゃ。話をしなきゃ)

自分たちのバンドのこと、これからレコーディングにとりかかる新しい曲のことを、頑張ってちゃんと話そう、自分を伝えようとYUKIは張りきった。

しかし、どうぞリハーサルを続けてください、と彼は言う。

話をするより、演っているところを見たいので、と言うのだ。

YUKIたちはリハーサルを続けた。いつものようにメンバーで意見を出し合いながら、2~3回演っただろうか。

「じゃあ。僕は、これで」

そう言うと、ディレクターの山中とひと言、ふた言、会話を交わし、佐久間は引き上げようとしている。

(なんで——？ まだなんにも話してないのに、これでもうわかったっていうの!? それともダメなの? なんなのよ——！！)

感じワルイ、とYUKIは思った。何か言わなきゃ言っておかなきゃ! YUKIの頭はそう指令を出すが、とった行動は突飛だった。

「ちょ、ちょっと待ってください。あの、佐久間さん、これ」

佐久間はきょとんとした顔をしてYUKIを見ている。ふたりの身長差は軽く30cmはあるだろう。YUKIは、手を差し出した。

「これ、あげる」

小さなカエルのぬいぐるみ、なぜそんなものを渡そうとしているのか、自分でもわけがわからない。

「あ。……うん、じゃあ。ありがとう」

淡々と何事もなかったかのように短い挨拶を残すと、カエルのぬいぐるみを手に、佐久間はスタジオを出ていった。

飄々とした人、その第一印象はレコーディング・スタジオに入ってからも変わらなかった。

「うん、いいね。今の歌、すごくいい感じだなあ」

YUKIの歌を、さりげなく褒める。

(佐久間さんに褒められると、どうしてこんなにうれしいんだろ?)

アドバイスの仕方も、チェックを入れるタイミングも、褒め方も、とてもさりげないのだ。まるで優れた先生のように、的確にYUKIの歌を診断してくれる。その物の言い方までがYUKIうれしくさせた。

レコーディングは順調に進んだ。「RADIO」「Hello! Orange Sunshine」ではマイケル・ツィマリングという新しいエンジニアが加わり、彼が仕上げた音を前にYUKIもメンバーも自分たちのサウンドに新たな可能性を感じた。

6月の終わり、YUKIたちは「Hello! Orange Sunshine」のビデオ・クリップを撮るため、北海道の旭川へ行く。

「上がった曲、CDにおとして持ってきました」

移動のロケバスのなか、JUDY AND MARYの仕事に就いてまだ数ヵ月という若手ディレクター土蔵貴人の声に、メンバーは沸きに沸いた。

「かけよう! 聴こう!」

「曲順、どうする?」

「聴こうよ、聴きながら決めていこう」

「POPSTAR」「どうしよう」「Hello! Orange Sunshine」「RADIO」「Cheese “PIZZA”」「小さな頃から」「HYPER 90’S CHOCOLATE BOYFRIEND」「キケンな2人」「クリスマス」「自転車」そして「ダイナマイト」。

喉の調子がおかしいときもあった。

わけもなく不安な気持ちになって、どんなに頑張っても詞が書けなくて、スタジオをキャンセルしたこともある。

特に「Hello! Orange Sunshine」のときは重症だった。

(そうなんだよね、山中さんとの最後の仕事って、この曲だったんだ。あのときはホントに困らせちゃったな)

「Hello! Orange Sunshine」のレコーディングを最後に、あれほどこのバンドの楽曲を愛してくれた山中は、レコード会社の人事異動でJUDY AND MARYの担当をはずれていた。

YUKIは、最後まで山中の手を煩わせたことを思い出す。

本当に詞が出来なかったのだ。

<夜の観覧車がぐるぐる回っちゃう 止まらない 光が欲しい>

輝くようなメロディに、こんな言葉しか浮かんでこない。

歌入れ当日の朝がやってきてもどうにも詞が出来ず、こともあろうか、YUKIはスタジオをさぼろうとした。

「風邪ひいたみたい。ごめんなさい。マネジ、今日は休みたい」

そなん嘘がマネージャーの堀江に通じるわけもなく、メンバー、ディレクターの山中と、全員が事務所の会議室に集合した。

自分には作詞のセンスはないからとそれまで歌詞にかかわったことのなかった五十嵐も、頭をひねってアイデアを出してくれる。

「YUKIちゃん、動詞なら動詞でここに集めてるから。参考にして」

恩田は何年も前から書き留めてきた<言葉表>なるノートを持ってきてくれた。そこには、たとえば ”見る” ”見つめる” ”眺める”といったふうに、ストックした単語がびっしり書き連ねてある。

作詞作曲し、自分でも歌をうたうというTAKUYAは、さすがにメロディと言葉とを符合させることに長けていた。

「Aメロの歌い出しのメロディ、こう変えてみたらどう? ♪オレンジをかじって~……ほら、こうすればもっと言葉のノリが良くなる」

みんなで頭を寄せ集め、「Hello! Orange Sunshine」を作った。

Tack&Yukkyで作詞した「キケンな2人」「RADIO」も、ひとりで書き上げたほかの歌たちも、このアルバムが出来るまでの時間のすべてが、YUKIには愛しくてたまらなかった。

まっすぐに続く北海道の道を、YUKIたちを乗せたロケバスは、新しい歌とメンバーの声とを響かせながらどこまでも走っていく。

「もう、すごい! これはすごいよ!!」

１曲終わるそのたびに、おぉ! すごい!! と歓声があがる。

「このアルバム、絶対イケる!」

「こーんないいもの作っちゃって、どうする? 俺ら」

「ホントだよ。次、どうしようか?」

(このアルバム、すごすぎ——ッ! もうホントにこれ以上いいものって作れないかもよ? すごいよ、それぐらいイイ!)

このとき４人はつながった、なんていうひどく青臭いでさえ、この瞬間のYUKIたちなら、すんなりと受けつけたことだろう。

４人の力が、ぎゅっとひとつに固まっていく。

生き方も性格もまるで違う４人が、JUDY AND MARYの音のなかで、今、確かにつながり合っている。

(このバンドって生き物みたいだ。しかも、むちゃむちゃ無敵!)

プリン・ア・ラ・モード ツアー、JUMBO APPLE MADツアー、Hello! Orange Sunshineツアー、そして学園祭と、JUDY AND MARYは春から秋にかけて、ライブも数多く行っていた。その間にクラブクアトロ、日清パワーステーション2 DAYSと、動員も会場の規模も少しずつ膨らんでいき、2ndアルバムを引っさげてのORANGE SUNSHINEツアーでは初のホール・ツアーを敢行することになる。

クリスマス・ライブの夜の渋谷公会堂。ステージのオープニングには、シルバーのミニのワンピースにピンクのヒールを踏みならし、テディ・ベアを抱えて「どうしよう」を歌うYUKIの姿があった。